

徒手理学療法部門の現状とこれから

2020年6月7日

徒手理学療法部門運営幹事

瓜谷 大輔

《関連する他領域との共通点と差異》

以前の分科学会・部門トピックスでもご紹介しましたが、はじめに徒手理学療法とは何かということを改めて確認しておきたいと思います。

世界理学療法連盟（World Confederation for Physical Therapy, WCPT）には複数のサブグループがあり、その一つに国際徒手理学療法士連盟（International Federation of Orthopaedic Manual Physical Therapists, IFOMPT）という組織があります。IFOMPTは徒手理学療法を「徒手的な技術と治療的な運動を含む高度に特異的な治療アプローチを用いた、臨床推論に基づく、神経筋骨格系の状態をマネージメントするための理学療法の専門領域」と定義しています。日本では日本運動器理学療法学会と徒手理学療法部門は別組織になっていますが、WCPTのサブグループには日本のような区別はなく、IFOMPTが運動器理学療法を扱う組織となっています。

徒手理学療法部門の特徴についてこれまでの活動を基に考えてみると、当部門では運動器理学療法の中でも特に関節・軟部組織・神経組織のモビライゼーション等のハンズオンによる評価と治療、それらに関連した運動療法・患者指導についての知識や技術に関する情報提供が挙げられると思います。

当部門は日本運動器理学療法学会およびウイメンズ・メンズヘルス理学療法部門と共に学術大会を開催しています。筋骨格系障害への介入や指導という側面では日本予防理学療法学会や産業理学療法部門ともリンクする部分があります。そういった意味では今後も我々の立ち位置から、これらの学会や部門との協同によって日本の運動器理学療法の発展に寄与していく必要があると考えています。

《今後充実を図りたいこと》

当部門のこれまでの活動は世界で用いられている徒手理学療法の知識や技術の教育が中心でした。一方で数年前から当部門でもプロジェクト研究に取り組んでいますが、日本の徒手理学療法のエビデンスの構築、日本からの徒手理学療法のエビデンスの発信といった側面はまだ非常に脆弱です。今後は学術的な活動にこれまで以上に力を入れ、徒手理学療法のエビデンス構築を会員の皆様と共に進めていきたいと考えています。具体的にはプロジェクト研究の推進や学術大会での徒手理学療法関連の演題数を増やしていくことを通じて、学術的な側面の強化を図っていきます。徒手理学療法をテーマにどのように研究を進めていけばよいかについて情報提供していく機会も設けていきたいと考えています。

《若手理学療法士への期待》

若手の理学療法士の皆様には是非、当部門の提供する情報や学習の機会を活用していただき、徒手理学療法を用いた評価力、治療力を研鑽していただきたいと思います。それと共に日々の臨床や研究での活動成果を通じて、日本の徒手理学療法のエビデンス構築という学術的側面からお力添えいただきたいと考えています。今後の学術大会で症例報告から調査・研究報告まで、徒手理学療法に関するトピックでの皆様からの演題登録をお待ちしております。